

# 本願成就の一心

―入出二門の源泉―

安 田 理 深

世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり。

無碍の光明は大慈悲なり、この光明すなわち諸仏の智なり。

これは「一心帰命の信」が表現されているわけですが、これは序分であるけれども、実は『願生偈』全体を一心という言葉で代表している。『願生偈』というものは、そこに仏の世界、つまり「尽十方無碍光如来」の世界というものが一心の対象界として開かれている。だから「廣大無碍の一心」である。世親菩薩が帰命された一心であるけれども、世親菩薩を超えている。世親菩薩に起った一心であるけれども、世親菩薩を救っている。それで「広大会」という。

「入出二門」というのは一心の背景です、五念門の行です。これは三行ありますけれども、第三番目の「無碍の光明は大慈悲なり」は宗祖の註釈です。そこで初めの二行を見ると、修多羅といってある。修多羅というのは、広くいえば三部経だけど、この場合は『大無量寿経』です。『無量寿経』の論です。曇鸞大師は三部経の一つに見ておられる。

曇鸞ばかりでなしに、三国七高僧の伝承では三部経は一つなんです。親鸞もひろんそういう伝承を受けてはいるんですけれど、ただその場合、一つといっても、帰するところは一つといふことで、帰するところは一つだけどもやはり差別がある。『大無量寿経』というものに対して見れば、『観経』『阿弥陀経』というのは方便の経、方便をもって

『大経』の本願を彰している。そういう点では『華嚴経』とか『涅槃経』とかいうものは、浄土の經典ではないけれども、かえって『無量寿経』の本願の真実というものを顕している。そういう大乘經典を否定して『大無量寿経』と云うのじゃないんです。

それでは、その『大無量寿経』とは根本的には何かというと、如来の因位の本願を明らかに書いてあるということなんです。結局、『華嚴経』とか『涅槃経』とかいっても、その本願に咲いた花である。『観経』『阿弥陀経』というのは方便です。方便をもって真実を彰してあるということについて、そこに浄土というものが彰されている。方便を通して真実を彰すこと、そういうニュアンスを隠顕というんです。だから結局、三部経というのは差別があるということ、隠顕であるというのは一応差別があるということ、その差別ということを注意するのは、実は一つだということ、隠すために差別ということが出てくる。だから差別してあるのは、やはり一つに帰することを彰すために差別してあるんだと云ういう意味があるんです。隠と顕とどちらでも心のままに取ったらいと云う意味じゃない。顕と云うものは隠を彰すためにある。方便と云うものを顕してあるのは、方便に止まるために方便と云うのじゃない、方便を翻して真智に帰るために方便が説かれている。だから曇鸞大師は頭から三部経は平等に一つだと言われるけれど、親鸞の方は差別を通して帰するところ一つになる。こういう違いがここにあるわけです。それで修多羅と云うのも、帰するところからいえば『大無量寿経』ということになる。

真実という言葉ですが、これはやはり化か方便に対する真実で、『大無量寿経』を真実功德相、「修多羅真実功德相」と書いてありますが、真実ということが出ておるのは論では「浄土論」、「我依修多羅真実功德相」。それから經典においては本願にあります。これは「教巻」ですけれども、「教巻」には釈尊が世に出興した出世の本懐として本願を説くとなっている。本願ということは阿弥陀の本願であるのみならず、釈尊の本願と云うとおかしいかもわからないけれども、釈尊の本懐である。「善導独明仏正意」と『正信偈』にあるが、これは何かとい

うと、仏の正意である。本願ということは仏の正意である。その法を説いてあるところに「恵むに真実の利をもってせんと欲してなり」とこういう言葉が『大経』には置いてある。「恵むに真実の利」、利益ですから、それは本願の利益です。『浄土論』では「真実功德」とこう言っている。『大無量寿経』には真実の利益、『浄土論』では真実の功德となっている。ここで真実ということに於いて『大無量寿経』と『浄土論』が相呼応しているわけです。そういう点でやはり方便と選んである。

『大無量寿経』の中に『観経』『阿弥陀経』というものを外から加えたのではない、『大無量寿経』の中から現われてきた。『大無量寿経』の中から出て、また『大無量寿経』の中に帰えす、こういうのを方便という。『大無量寿経』の外のほうから加えたものじゃないんです。どこから出てきたかという、十九願と二十願から出てきた。そういうことは「方便化身土巻」でとりあげられている。だから『観経』『阿弥陀経』の方便というのは真実に対していう。『大無量寿経』は本願を説くというけれども、本願の中に方便の本願もある。方便というものは本願にもあるし、また教説の上にもある、その意味での方便の願成就の世界というものを『浄土論』は受けとっている。また『歎異抄』にも言っているように、聖典というものは真仮あいまじわっている。何でもお経に書いてあるその言葉通り、その言葉にとらわれて領解することじゃない。本当の經典の精神というものはつきりとしたかなければならない。勝手に読むなら何を聖とかかわからない。だから、そういうところで『大無量寿経』を読めば何でもわかるということではなしに、三国の高僧の歴史というものが『大無量寿経』というものを真実に読んでこられた歴史なんです。よくこのごろは「無量寿経に聞く」とか、「観経に聞く」というようなことが行なわれていますが、それは『大無量寿経』を聞くというより、『大無量寿経』に聞くのであって、『大無量寿経』に自分の問題を聞いてきた、その歴史が三国の高僧の積論である。『浄土論』もその一つです。見たまま聞くんだから、何も三国の高僧はいらないということにもなりますが、聞くということは容易でない。

經典には真実も方便もあるけれども、その方便を捨てて、真実の意義を顕したのが『浄土論』である。ですから『教行信証』でも、『浄土論』というのは「化身土巻」には一箇所も引いてない。前五巻に書いてあるきりです。『論註』のことはちょっと出ていますが、それも一箇所だけです。だいたい『浄土論』及びその『論註』というものは前五巻だけです。『観無量寿経』の解釈を造られた善導大師の『観経疏』というものは両方に引いてある。同じ一箇所の言葉でも、ある部分は前五巻に、ある部分は第六巻にまわしてある。それも何か善導大師の釈論の読み方が非常に精密なんです。一箇所に出ている言葉でも、ある部分は前五巻に配し、ある部分は「方便化身土巻」に分けて引いてある。それについては細かいことはいろいろありますけれど、分けて引いてあると、不思議なことに、分ける前はわからんけど、分けて引かれてみるとなるほどそうだとかならずける。無茶苦茶に分けてあるんじゃない。分けられて初めてわかる、初めから別であることがわかる。そうでないとわからんですね。たとえて言うたら、専修念仏に対して雑行雑修という。雑行について十三失、十三の過失というものを善導大師が述べておられる。ところが親鸞は、それについて前九失は十九願の過失で、後四失は、これは二十願の過失であると解釈しております。ちょっとわからんけれど、分けてみられればなるほどそうだなあとわかるわけです。一例ですけれども、そういうようなことがある。

それで『浄土論』というものは方便を簡んで真実というものを顕す。真実功德ということが大事なんです。だから「修多羅真実功德」というのは何かというと、これは曇鸞大師ではあるが、『浄土論』の二十九種莊嚴功德というのが真実功德、これはもうまちがいないことです。親鸞からみると、真実功德は名号ですね。真実功德というものは名号をもって浄土に通じている。浄土の功德を穢土に回向するのが名号です。我々は名号を通して穢土において浄土の徳に触れる。浄土が浄土自身を回向してくる。『浄土論』では念仏というのは浄土のはたらきなんです。念仏という所に浄土が来ている。それで念仏往生という。念仏を称えて往生するのじゃない、念仏が往生なんだ。念仏に浄土が来とのだから、念仏として我々は浄土というものに触れる。浄土が来るのを還相という、浄土へ行くのを往相とい

う。念仏のところは還相、浄土が来ている。また、念仏において浄土に往相する。そういう意味で眞実功德と言います。固定してどこかにあるというものじゃない。それが何時でも何処でも誰にでも眞実功德に触れることができる、そういう場所が名号です。だから眞実功德の名号によって、はじめに「一心に帰命したてまつる」とこのようにいつてある。これを見るとすぐにはわかることは、世親菩薩の『浄土論』は『大無量寿経』に返えしてみると、本願成就の文なんです。世親菩薩の『願生偈』というものは、世親菩薩が体験された本願成就の文であると、このようにいえると思います。

『浄土論』は『大無量寿経』の論だけれど『大無量寿経』についてどういことが書かれているかというと、これは本願成就の文である。『大無量寿経』では本願成就の文というのは積尊の言葉です。積尊の教えをもって本願成就の文が説かれている。だから本願成就の文というのは積尊からみれば教えであるし、世親からみれば行である。本願成就の文というのは世親からいえば行であり、積尊からいえば教えなんです。そういう具合に、教えの言葉をそのまま応えることがうなずいたことなんです。教えの言葉と教えを受けたということが一つなんだ、それを「如是我聞」という。違っておいたら如是といわん。だから聞くのも教えるのも如是ということが一つなんです。

「我聞如是」ともいうが、我聞如是といっても、如是我聞とは一緒のことなんです。「正信念仏」ともいうし「念仏正信」ともいってある。正信念仏といえは普通の言い方ですけど、正信と念仏といえは、それは発音もそうでしょう、念仏を正信、正信念仏とこう言えば、それは普通のポジションです。正信と念仏がどこに力点があるか、つまりアクセントですね。正信というところに力点はいっているか、念仏に力点はいっているのかどっちかということですね。これを見ていくと、正信念仏と言ったら正信と念仏が同じ、つまりアクセントがない。どこに力点があるのかという時に、その力点を表わそうと思うと逆倒しなければならない、念仏正信とこういう具合に。それから念仏を正信する時は「念仏、これが私の正信であります」と力点がある。だから如是我聞となる。如是我聞というようなそんな

発音はせんのです。如是、と言って我聞。我聞とは静かな発音です、如是は俊舌音。そうでしょう、聞くのは私です、「如是、これは私の聞いたことだ」。こういう様にアクセントが違ってくる。

如是ということは一つだけだから、如是ということが聞いた内容であると同時に、また教えた内容である。如是は本願、教えるのも本願、聞くのも本願である。『大無量寿経』にやはり我聞如是ということがあるけれど、この如是というのは、今言ったように本願を意味する。『大無量寿経』は全体が本願を説いてある。全部が本願を説いたものだ。浄土のことも説いてあるし、いろんなことが説いてある。だけど、それらはいろんなことを説いてあるんじゃない、いろんなことで本願を説いてあるんだ。本願がテーマだ。いろんなことを言って、あるいは本願をテーマとしていろんなことが説かれてある。その本願はどこにあるか、そう思うと、名号にある。その辺をだんだんに押していくというと、如是の法というのは名号である。名号のいわれを説く。名号というのは如を聞き取る。名は義を表現している、名に表現されてある義というものを説く教え、また名に表現された義を聞くということである。つまり、「依る」というのはそういうことをいう。聞くというのには依るんでしよう。「修多羅真实功德に依って」この本願の名号のいわれとして、名号を体として、名号のいわれを説かれたその釈尊の教えに依って、それを通じて、そこに世親菩薩が一心というものを感得された。こういうようなことなんです。

真実の教えという場合は、真実の教えは『大無量寿経』と書いてありますが、真実の教はどれをいうんだというと、全部が真実の教えだとそのまま言っても、聞くということは、これは要点を聞くということをいうわけです。初めから終りまでノートを取って聞くというようなものではない。ノートなんか取っておっては要点なんか聞けん。そういうようなもので、要点を聞くというのはどういふことかという、気付くものを聞く。全部書くというのは頭で聞くからです。気付かないものまで聞こうとするから全部書くようになるので、聞くといったら頭じゃない。頭が

聞くのは全部であるけれども、魂が聞くんです。魂という言葉もわからないけれど、まあ自分の宿業を通して聞くんです。頭のほうは理知を通して聞くんですね。宿業に響かせて、宿業で包んでいるもの、それを魂という。本願というのもこれは仏様の魂。魂は魂でないといけない、頭じゃだめだ。それを感応道交という。我々の魂が本願を感じれば、仏の魂を感じれば、仏の魂は我々の魂に応じてくる。共有する魂なんです。めんどうなものじゃない、本願ほどわかりやすいものはないんだ。頭はいらなないので。頭というようなのは問題にしないのが本願だ。本願は頭でない、身体だ。本願に応えたといえは心が応えたというんじゃない、全身全霊が応えた、私の身体が本願の応えになる。そうなったのを、それを攝取不捨という。

真実の教えというものは、『大無量寿経』全体が真実の教えというけれど、それでは今言ったように、あまり広すぎてその要点がわからない。そうすると、結局は本願成就の文というのが教えになる。『大無量寿経』は四十八願を説きたまえる経典、そういう点で『観経』『阿弥陀経』と区別される。本願を説かれた、その本願をテーマとして一切を説いた。だから、『大無量寿経』のいちばん大事な教えというのは本願をいう。『浄土論』を通してみると、それが優婆提舎である。

本願を説くというのが優婆提舎なんです。本願を説かれた経典であるから、本願というものが『大無量寿経』の真実の教えだけでも、その「説く」という言葉ですが、説くという言葉は何かという、本願を説くとは、分析という意味がある。それとも一つ、解説げせつという言葉がある。説くには解説かいせつするという意味がある。本願を説くというが、本願というものは言葉を超えたものです、その言葉を超えた義をいうための解説なんだ。本願を言葉で表現した、こういう意味がある。その本願というのは我々にとってはどんな意味があるのかということ、それは解説かいせつになる。ただ本願は本願であるといっても、それは答えにならない。それだけではわからないでしょう。その本願というのは私にはどういう大事なものか。それがさっき言った要点、私に響かせてくる。本願は十方衆生を救うと語っている、そ

の十方衆生に語られた本願であるけれども、それを私に響かせてくる、それは私には何を意味するのか。これは参考になるといふようなものじゃない。自己の存在根拠を語っておるのが本願である。本願がなくても生きれるということはない。みんな生きることばかり考えるけれど、それより先に本願があれば死ねないのです。死ぬこともできない。本願のほうも、片手間に説くんじゃない、出世本懐、この為に私は説く。つまり聞きたいと思う者は聞けということじゃない、喉笛をとって、これを聞けと言うんだ、聞いてくれと言うんだ。そういうのが出世本懐。「まあ、わしは言っておくけれど、何か参考になったら聞いてくれ」というような、そんな程度じゃない。喉笛をとって振り回してもらわないと我々にはわからないのですよ。それを聞けというんだ。だからして、聞くのも全身全霊を傾けて聞く、我々の全体が耳にならんといけないんだ。全身全霊が耳となって聞く、これでないといけない。だからそういう意味では、聞かすといふのであるのだが、ただ聞かすといつても、ただ聞かさない、聞かすだと言ふ注意してある、『涅槃經』に依つてですね。聞かすといふことはただ聞かすといふのじゃない、聞かすするんです。信心でも聞かすから生じた信と、思かすから生じた信と二つあると言つてあります。

それで解説といふことと分析するといふことです。本願は我々にどうして大切かといふと、それが成就です。大切なのは成就の文といふことです。十方の諸仏に我が名をほめられんといふのが十七願ですが、十方の諸仏に我が名をほめ称えられんと誓うといふのはどういふ意味があるのか。ただ広告しているのか、何を我々に語るのか、それははっきりしておかなければいけないでしょう。それが解説です。この解説といふ場合は、これはつまり本願を分析しているだけではどうにもならん、解説するから教義なんです。何を意味するか、それが教えますから。だから本願といふものは教えとしても読めるし、教えではなく一つの文学としても読める。分析なら文学として鑑賞ができるわけです。けれども教えといふのは、『大無量壽經』も文学には違いないが、けれども小説とちよつと違ふところがある。何か我々にとつて意義を明らかにするといふこと、これが教えます。それが『大無量壽經』が要求している読み

方じゃないですか。小説として読めというのじゃない、態度を要求している。態度というのはつまり求道心を要求している。求道的態度で読むということも経典が要求している。寝転んでいても読める、炬燵にあたっていても読める。鑑賞としての態度をこちらが持っている。こちらの都合で読むのが鑑賞なんです。経典のほうの要求、経典には要求がある。何を求めるか、そうすると求道という態度を求める。つまり問題を持って読むようにする。問題を持って読むから「に聞く」ということがある。問題がなければ、経典は響かないのだ。問題に響く。一大事の問題に響く。そういう態度を要求する。

こういうふうには、解説するということは教えというものになる。だから真実の教えといえは『大無量寿経』全体だと、そういうことを言ってもわからないのです。まあ結局『大無量寿経』全体だけれども、こう言ってもわからないから、もとのところは本願を説くというところにある。しかし、本願といってもまたわからない。自分にひきかけて本願を聞くと、それは本願成就の文である。本願成就の文といっても、十一願成就の文もあれば、十八願成就の文もあれば、二十二願成就の文もあればいろいろある。こう言えるのだけれど、十八願成就ということが成就の中の成就である。だから他の願には、十七願成就の文とか十一願成就の文、つまり必至滅度の願成就の文、諸仏称名の願成就の文、いろいろ言っているでしょう。ただ十八願成就の場合だけはただ本願成就、何の願成就なんて言う必要がない。その本願成就の文というのは、皆さん知っている通り、

諸有の衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまえり。かの国に生ぜん願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。

こういう文です。あれだけなんです。読むべきところはそこなんだ。あの本願成就の文というものを、別の言葉で最もよく表わしているのは『歎異抄』第一章なんです。『歎異抄』第一章というのは、本願の成就の形を明らかにするというのが第一章です。あそこでは念仏、それを本願成就の文では「信心歡喜乃至一念」という言葉で表わし

ています。一念、信心の一念、信心歓喜ということが大事です。一念の信心と信心とを明らかにする。一念ということが信心を表わしている。『浄土論』で一心というのはそういうことです。だから親鸞も「一念すなわち一心」と、こういうように言っているわけですから『教異抄』では「念仏もうさんとおもいたつころ」と、こう言っている。成就の表現というのはここにある。

『教異抄』には、こういう表現がたくさんあるでしょう。「おもいたつ」というのはどういう Satzge なんだということ、言葉が生きているんだ。「信心歓喜乃至一念」よりも、「一心帰命」よりもっと生きているんだ。「念仏もうさんとおもいたつ」と、もくもくと涌き上ってくる、これは言葉が生きているのでしょう。あのように生きた言葉がどこから出てきたのか。あそこで十八願のことを「撰取不捨の誓願」と書いてある。これもここでは関係がある。「無碍の光明は大慈悲なり」というようなことは「撰取不捨の光明」ということを表わすんです。「撰取不捨」というと皆さん知っている通り『観無量寿経』の言葉でしょう、「念仏衆生撰取不捨」、やはり『観経』というものを大事にしている。『観経』に於いては韋提希夫人は阿難じゃないかね。大きな悲劇というものを潜って本願を体験したのは韋提希夫人です。韋提希夫人というものは、女性にしかつ凡夫である。まあ、阿難は凡夫かもしれん、聖者になかなかなれなかったということもある。だいたい阿難の場合学生ですね。頭の悪い学生というふうなもんですね。それがこの本願成就、そこに本願が成就した、その記録です。阿難が本願を体験した、つまり、撰取不捨、現生不退の体験を得たということはどこで表わされておるかというところと「与韋提等獲三忍」ところありますね、「廓然大悟して無生法忍を得」た、こういう言葉で表わされている。ああいうのは信心の智慧というんです。あれがつまり真実の利益。一念の信において往生成仏を確定した、一生の大事がそこで決定した、『大無量寿経』に説いてあるところの真実の利益というのはそういうものなんです。

そういうことを『観経』に語ってある。「無生法忍」智慧ですね、智慧の信心、信心の智慧をいただく。韋提希夫

人はどこで信心の智慧を得たか。それは決まらない。問題はその辺ですね。いろんな人が『観経』を解釈している。学者の解釈ですから、それはでたらめな解釈じゃないんでしょ。だけど、親鸞は「善導独明仏正意」と言った、独り明らかにしたと。いろんな人が解釈しているけれども、どうもなにかそこに解釈が入って、やはり仏の正意に触れていない。仏の語ろうとされたその精神に触れていない。善導独りだけがそれを明確に捉えられた。つまり、韋提希夫人はどこで無生法忍を決定したかということなんですが、いろんな人が言っている。聖道の人々は、いちばん終りに説いたのだから得益分であるという。だから、『観経』全部の説法を聞いて、韋提希夫人はここで無生法忍を得たというようになる。それは間違いないけれども、あまり安全率が高すぎて、どうも何かはつきりしていない。余分なものもある。的確でない。その辺でちょっと、間違いというわけではないけれども、ピタッとしていないのです。中心、三願的証という言葉があるが、つまり、的証になっていない。的を得ていないのですね。間違いというわけじゃないけれども、的証になっていない。

仏の正意を言い当てていない。そこへいくというと、さすがに善導だ。善導は第七華座觀に於いて韋提希夫人は無生法忍を得た、第七華座觀に於いて韋提希夫人は本願成就の心というものを決定されたところのように言う。韋提希夫人が信仰を得たということは、信仰を得た人でないとわからない。だから質問に答えることができるというのはそういう意味です。ピントがはずれていない。本当にお互いに苦しみ悩んで、そしてそれを突破してきたんです。そういう人が初めて苦しみ悩む人に、それを解きほぐしてあげることができる。何か知らないことばかり説明していても的を得ない。かゆいところに手が届かない。やはり善導はピッタリと押えている。それは何故かというところ、善導大師は自分自ら韋提希になって『観経』に聞いたからです。他の人は韋提希夫人は他人だひとと思っている。古今の聖道の諸師は、韋提希夫人を材料として説かれた文学的表現というようなことで考えている。韋提希は他人だひとと。善導大師は自分自身だと。韋提希の中に自分を読んだ。だから韋提希夫人は実業の凡夫であるという、女にしてかつ凡夫である。

ところが、古今の聖者は皆、韋提希は聖者なんだ、ただ凡夫という形をとって象徴している、こういうように凡夫というような形で、仮に凡夫の姿をとっているだけで本質は聖者であると見る。文学として見ている、戯曲として見ている。ところが韋提希夫人は現実の人間である、善導も現実の人間だ、そういうように善導は理解した。

そういうようなことは『観経』の話で、今日のところでは必要のないようなものですが、『観経』第七華座観というのは何であるかということが大事なんです。「除苦悩の法を説かん、よく聴けよ」と、こういう具合に釈尊は言うている。「苦悩を除く法を説こう、お前等よく聴きなさい」と、韋提希夫人と阿難に言われる。「この語を説きたまう」とある、「この語を説きたまうた時」とね。「除苦悩の法を説こう」こう言われた時に、そう言った時に、まだ除苦悩の法を説かれない先に、そこに仏が空中に住立した。空中住立を見た。説くのは観だ、『観経』は最初から終りまで観想を説いた。観想というのはこれ除苦悩の法である。ところが、そこに説こうという言葉を使った時に、まだ華座観の観想を説くに先立って、仏自身がそこに現われるのを韋提希は見た。仏のほうからいえば現われる。韋提希のほうからは見た、これが観ですね。観の中に見ができた。見とある一箇所、それが観の成就という意味だ。観の中に見がある。あそこに観が完成した。そういう形で、見ということで「信心歡喜、乃至一念」を象徴している。観の成就である。だから世親菩薩のほうは、それで一心を起こした。一心によって「彼の世界を観ずるに」と言った。「仏の本願力を観ずるに」とこう言われている。一心に観というものが成就している、観の智慧が成就している。韋提希夫人は空中住立で観が成就して見になった。その時に、この立つということがある。立つ、これなんだ。「念仏もうさんとおもいたつ」と、それが『歎異抄』に表わされている。たちどころに成就する。打てば響くというわけだ。撰取不捨の誓願といえは十八願です。撰取不捨の誓願というものを語っている、そこに『観経』を通して語ってある。撰取不捨というのは『観経』の言葉です。『観経』に依れば、撰取不捨というものをいただいた場所が第七華座観である。たくさん観が成就している。そこに、立つというのは、つまり「たすけんとおぼしめしたつ」というもの

がくる。それだから善導は「念仏もうさんとおもいた」った。聞くというようなことはそういうことです。こういうのを感じると言うんです、感応道交と言うんです。本願を聞くということは冷静に聞くというようなことではないのだ。ああそうかというようなことではない。全身全霊に響く、立ちあがるのは、感応道交です。立つということは、抜け出すという意味です。女であるとか、凡夫であるとか、宿業であるとか、在家であるとか、坊主であるとか、そんなように限定があるでしょう。それから抜け出すんです。それを汝と問う。「自己とは何ぞや。」わしは木工ですか、百姓だと自分で言っても自己にならない。百姓はどれだけでもいる。わたしは女やと言っても、女は何人もいる。「あなたは何だ」そういったらわからないでしょう。それが出てきたんだ。そのようなものを抜け出してきて、ここに立つというんだ。「念仏もうさんとおもいたつ」と言う時は自己なんだ、本来の自己だ。そういうのを本願成就の文というんです。それを『観経』では象徴的に「空中住立」というような、一つの形で表現してある。言葉で表現してない。形で表現してある、それが『観経』なんです。「広説衆譬」といわれるのはそういうように象徴的に出る。

『大無量寿経』のほうはさすがだ、言説してある。狂いのないように、暗示ではなく、はっきり言葉に書いてある。ところがこの「信心歓喜乃至一念」というところは、どこから出てきたかというのと、「聞其名号」という字がある。名号を聞いてということがある。その信というのはどうして出てきたかということがある。何もないところに空中から信というものを起こすというようなことはない。そこに聞其名号と書いてある。これが『大無量寿経』の面目そのものでしょう。聞ということがそこに書いてあるわけですから。ここに世親菩薩が「修多羅真実功德に依って」この依ってというのは聞をいうんです。名号に依って本願を聞く、依り所です。

ここに「聞其名号」と書いてある。ところがそこに其という字がある。其というのは代名詞だ。代名詞というものは、何か前に言っているから、それをもう一度繰り返さないのだからと、其の字がある。其の名号です。本願成就の文は、なるほど「信心歓喜乃至一念」の成就を語っているのだけれども、どうしてそれが生まれてきたかというのと、聞名という

ところから来ている。その名号というのはどこから来ているか。名号というのはそこに其という字が置いてある。ただ名号というのではない。その其が何か言っているんです。これは今、言ったように十八願成就だが、その其というのはそのすぐ前の事を受ける。前といたら十七願成就である。十七願成就が諸仏の称讃である。諸仏が称讃された其の名を聞いてということです。称讃というのはただ立派なものだからそれを広告することではない。十八願というものは、十八願成就だけが単独に出るものではない。十七願成就を受けて十八願成就というものが成り立つ。十七願と十八願というものは二つの願で、十七願が終ってすぐこれから別の十八願というのではない。一つの願だ。一つの願というものにも分節がある。その前には十一願がある、後には十九の願、そういうのは切れているけれども、十七・十八というの切るわけにはいかない。こういう関係がある。

だからここにもありますね、世親菩薩は「修多羅真実功德に依って」という第一行と、「一心に帰命したまえり」というこの第二行とは切るわけにいかない。それを「依る」という字がつないでいるんでしょう。「依って帰命したまえり」。十七願成就と十八願成就は切るわけにいかない。だからして、『略文類』というのが親鸞にあるが、それに十七願と十八願を語っておられる所には、本願成就の二願成就の経文を一つの文章として引いてある。

十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう。諸有衆生、その名号を聞いて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん、

という具合に、切らずに一つの経文として引いてある。本願のほうは引いてない、成就の文として、十七願成就と十八願成就の経文を一つの文章として引いてある。こういうようなことが其というのにはある。それがここに現われている。

(本稿は、昭和四十九年十一月一日、岐阜県慈光会主催の『入出二門論』の会における講義の前半の筆跡を整理したものである。文責 編集部)